



杉田 晴彦  
(品質審査部 次長)

## 第3回 JQA人のオフタイム うまく弾けないからこそ 探求し続けた —市民オーケストラの バイオリン奏者として—

コンサートホールの舞台上で美しいクラシック音楽を演奏する市民オーケストラ。そのほぼ中央でバイオリンを奏でているのが杉田 晴彦である。大学時代に始めて熱狂的にのめり込んだバイオリンは、20年近い中断を経て、8年前から再び杉田の人生のパートナーとなった。「JQA人のオフタイム」第3回は、杉田の熱い音楽人生を紹介する。

### チャイコフスキーに魅了された小学校時代

クラシック音楽との出会いは、なぜか家にあったチャイコフスキーのレコードだった。小学生だった杉田は、未知への好奇心から、その「白鳥の湖」「眠れる森の美女」を聴かせてもらった。古いステレオから響き渡る重厚なオーケストラの音色に、杉田は一瞬で魅了された。以来、誕生日にはレコードを買ってもらうようになった。

「最初を買ってもらったのはベートーヴェンの『運命』です。ひたすら聴き続けていたので、小学生にして『運命』の第4楽章の終わりまで全部知っていました」

最も衝撃的だったのは、高校生の時に聴いたストラヴィンスキーの「火の鳥」「春の祭典」だとい

う。独特の旋律や複雑なリズム構造は、これまで聴いてきた世界とは全く違っていった。杉田はまず驚き、自由さ、新しさにめくるめいた。しかし、オーケストラへの情熱がすぐにバイオリンにつながったわけではない。小学生のときにはピアノを習ったが、中学・高校では特に楽器に親しんではいなかった。

### 弦楽器が一番難しい

初めてバイオリンに触れたのは、大学に入学して管弦楽サークルに入ってからだ。

「希望の楽器を聞かれて何となくバイオリンと答え、そのままバイオリンをやることになりました」弓の持ち方、楽器の構え方、指の動かし方など、毎日のように基礎練習を繰り返したが、杉田が「今までやったことなかで一番難しいのが弦楽器」と振り返るほど、音は思うようにならなかった。

「人間の関節の動きは肩も肘もすべて円運動で、バイオリンを弾くには円運動を協調させて直線運動を作る必要があります。また、音の強弱や音色には、弦に弓を当てる圧力と弓を弾くスピード、駒からの距離など、さまざまな要素が複雑にかかり、それを無意識にコントロールできるようにならないと、まともな音にはなりません。ようやくまともな音が出てきたと思えたのは、大学を卒業するころでした」



弦楽合奏の練習風景(復帰5年目の2018年5月)

## 探究心に火がつき、のめり込んだ日々

思うようにいかなかったからこそ、杉田はのめり込んだ。なぜできないんだ、どうしたら弾けるんだ。ここでやめたら楽しさを感じないまま終わってしまうと、鏡に向き合ってフォームを直し、指の位置や動きを調整しては弾き直した。オーケストラの魅力の一つに、大勢の仲間とともに一つの響きを作りあげる喜びがあるが、杉田の熱中はそれ以上に、うまくいかない理由を見出し、どうしたら改善できるかを考え、必死に練習を重ねて思う方向へ進むとする探究心とともにあった。

社会人になってから数年たったころ、サークルOBを中心にアマチュアオーケストラを結成。一時期は後輩や仲間のオーケストラから助っ人を頼まれるなどして、4つのオーケストラを掛け持ちしていた。それぞれ演奏する曲は異なるから、楽譜の束がうず高く積み上がる。強い想いがなければとてもこなせなかった。

## 長い中断を経て、再びオーケストラへ

しかし、杉田は一度オーケストラをやめてしまう。仕事が多忙になったことに加え、子どもも生まれ、家族を放って趣味に没頭するのが忍びなかったのだ。それからは家庭と仕事に専念した。練習もしなかったし、復帰の誘いも断った。そのうち子どもは中学生になり、吹奏楽部でクラリネットを演奏するようになった。

「やはり血が騒ぎました。復帰しようかと先輩に連絡したのが8年前のことです。練習に行くと大学

生のころのメンバーが大勢いて驚きました。子どもを連れて来ている人や、家族で参加している人もいました。懐かしかったですね」

最初は難易度の低いセカンドパートから…と思っていたが、そうはいかない。実戦の方が早く復帰できるからと、ファース

トパートの楽譜を渡されたのだ。それもメンバーが杉田を信頼していたからこそだろう。その日の練習曲はシューベルトの「死と乙女」。いきなりの実戦練習は非常に厳しく、もちろんその日はうまく弾けなかった。しかしそれで持ち前の探究心に再び火がついた。昔と同じように弾いているのに何かが違う？ 年をとって指の柔軟性や関節の可動範囲が変わったのか？ 練習のなかで、課題の発見、解決策の探索、修正を繰り返す日々が始まった。現在は、コンスタントに月1~2回の練習に参加し、フルオーケストラのコンサートと弦楽合奏のコンサートに毎年欠かさず出演している(コロナ禍で中止の年もあった)。

音楽をやっていて良かったことは？ という質問に対しては、「良かったことや悪かったことについてあまり意識していません。音楽は私の生活の一部

であり、あって当たり前のものです」と返ってきた。

「生きがいなどという大げさなことではなく、目標も関係なく、老後もずっと仲間と楽しく演奏できればいいですね」

オーケストラには20歳代の若い仲間もあり、異世代交流も新しい発見につながって楽しいという。探究心に導かれ、音楽という一生ものの趣味を手に入れた杉田の日常は、この上なく充実している。



2018年の定期演奏会チラシ。杉田は一時期エルガーに凝り、「エニグマ変奏曲」を演奏したいと希望していたが、残念ながら叶わなかった。



杉田の所属する「横浜シンフォニックアンサンブル」の定期演奏会の様子。2018年1月、ミュージアムシンフォニーホールにて。